

講義題目：問答の観点からの哲学

第 10 回 (20181221)

§9 自然主義からの多様な表象・記号・意味の説明

1、理論哲学の概観：自然主義 対 構成主義

2 ミリカンの生物学的自然主義

(1) 「記号」とは、「意味する」とは、何か？

「意味する」は、心に抱く、意図する、表示する、という 3 つの意味をもっている。

「記号」は、二つの特徴（目的と表示）を持つ。

(2) 自然的記号 (natural signs) と志向的記号(intentional signs)の区別

自然的記号＝「ある有用な結果がその副産物としてたまたま自然的記号の生産をもたらす場合」

志向的記号＝「記号の生産そのものが有用な結果であるような場合」

(3) 志向的記号の区別：オシツオサレツ記号と記述的記号と指令的記号

オシツオサレツ(pushmi-pullyu)記号 (P-P 記号)

「P-P は、事実を表象することとその事実にあつかわしい行動を指令することが差異化されていない記号」

「ウサギの危険一足叩き」「ミツバチのダンス」「ベルベットモンキーの有名な警告用の三種類の鳴き声」「人間の笑いや渋面」

前回のミニレポート課題

「渋面のほうは、害になるかもしれないことがいま行われたことを告げるとともに、それを行うことをやめるように、あるいはふたたびそれをおこなわないように指令する。」 216

原始的動物のレベルの P-P

高等な動物の場合 (ここから前回のノートを修正して、再説します)

「ほとんど分節化されていない P-P 表象から始まる内的表象の進化は、生物界全体の大進化と並行的な道を歩んだように思われる。まず最初に、表象がもっとも分節化されるようになり、その結果、表象されることががますます明示的に表象されるようになる。それから、分節化された諸部分のより専用化された機能から、より複雑な機能が組み立てられる。さらに、この専用化された諸機能をそれぞれかなり独立に遂行する方法が発達してくる。この方法は、ときに、新しい生成・テストの仕方が発達することによってもたらされる。続いて、この分節化された専用の諸機能が、新しい仕方で再結合され、再統合される。ここに含まれる一般的な方針、すなわち、分解し、諸部分を別個に調整し、再結合するという方針は、もっと一般の進化的な発達に典型的にみられるものである。」 236

「同じ対象が、動物のその時々々の企てと必要に応じて、異なる機会に異なるアファードダンスをもつものとして、動物によって知覚される。」 251

「ある対象をある目的のためによりよく認識できるようになり、そしてこの能力を応用して、その同じ対象を他の多くの目的のために認識できるようになれば、それはありうるいかなる実践的な用途からも分離された純粋な事実を知覚する能力に到達したのだろうか。」 251

そうではない。「純粋な事実の表象」とは、いかなる特定の目的にも捧げられていない表象であるからである。

「対象や客観的状况を表象して、それらの異なるアフォーダンスを異なる機会に認識する動物は、確かに事実を表象すると言えよう。しかし、そのような動物は、当面いかなる利用にも関心のない事実、あるいはまだどう利用してよいかまったくわからない事実を表象できる動物から区別されるべきである」 252

この「当面いかなる利用にも関心のない事実、あるいはまだどう利用してよいかまったくわからない事実を表象」が記述的表象であり、それをもつのは人間であるとミリカンは考えている。なぜなら、次のように述べていたからである。

「私が知る限り、人間以外の動物の間で用いられる志向的記号は、すべて P-P である」 216

では、人間にはなぜそれが可能になったのだろうか？

記述的表象の定義と成立（ミリカンから少し離れて）

「純粋な事実」を表象できるのは、人間だけであるとミリカンはいいたのだろうか。しかし、本当は、人間にもそれは不可能なのではないだろうか。「当面いかなる利用にも関心のない事実、あるいはまだどう利用してよいかまったくわからない事実を表象」するという事は、可能だろうか。

もちろん人間は、動物と比較すれば、実際の利用への関心をもたずに、事実を表象することが可能であるようにみえる。しかし、そのようないわば客観的な認識が発生したのは、それが有用だったからではないだろうか。

<実際の利用と関わらない記述的表象>と<実際の利用と結合した表象>という区別であれば、曖昧で相対的な区別になってしまうかもしれない。たとえば、「今日は青空だ」は、何をすべきかを示していないかもしれないが、雨を避ける必要がないことを示している。おそらく、どのような表象も、行為と関係する文脈をもちうるだろう。

ミリカンが言うように、動物も、ある対象や状況が複数のアフォーダンスを持ちうることを知っており、その中から「選択する」だろう。人間と動物の違いは、この「選択」の仕方にあるのではないだろうか。動物はアフォーダンスを選択する場合があるが、アフォーダンスと無関係に対象や状況の表象をそれだけで持つことはないだろう。しかし人間は、現実のアフォーダンスと直接に結合しなくても、対象や状況についての表象を持ちうる。そして推論によってあるアフォーダンスを選択する。人間は、対象や状況の表象を前提した推論によって、それを行為に利用することができる。

人間は、実践的推論によって行為を決定することができ、実践的推論は、前提に、記述的表象と指令的表象をもつ。記述的表象とは、実践的推論の前提となる事実についての表象である。その表象がならんからの利用と結合しうるとしても、そのことがその実践的推論において無関係であれば、

そのときそれを「記述的表象」と見なせるのではないか。つまり、推論における働きによって、「記述的表象」や「指令的表象」を定義できるのではないだろうか。

#指令的表象の成立（ミリカンにもどって）

動物は、空間的配置と時間的配置に関する知識を持つ。アフォーダンスの中には、時間的配置に関する知識が含まれており、未来の状態についての表象が含まれている。

「たとえば、近づいてくるボールや一撃をかわしたり、飲み込むための用意に唾液を出したり、走っているときに前方に迫ってくる急な曲がり角を曲がる準備をしたり、等々の活動を指令する。」 264

「未来の出来事の表象は、動物にとって P-P 記号のオシツ面として働く。」 263

「動物は、そこにあるものの知覚によってここで導かれるように、のちに起こるものの知覚によっていま導かれるのである。」 263f

ミリカンは、人間が作った巣箱へ行こうとして、経路を探索するリスの行動や、高いところにあるバナナを取ろうとして、箱を積み上げるという方法を見つけるチンパンジーの話をふまえて、次のように言う。

「リスとチンパンジー、ラットはすべて、次の重要な点で、まったくのオシツオサレツ動物とは異なる。それらが知覚するアフォーダンスの一部は、たんなる可能性としてしか知覚されない。それらは自分の知覚するすべてのアフォーダンスによって動機づけられるのではなく、自分の投射した目標ないし目標状態への完全な経路の一部として捉えたアフォーダンスによってのみ動機づけられる。」 286

「知覚される多くのアフォーダンスに従うことの結果を心に描く動物は、多様に分岐する可能な未来状態を並列的に表象して（ただし、必ずしも意識的ではないが）それらのなかから「選択する」ことができるであろう」 287

このような高度な動物を考慮して、次のように区別できるだろう。

- ①まったくのオシツオサレツ動物
- ②複数のアフォーダンスから「選択する」動物
- ③記述記号と指令記号を持つ動物（人間）

では、②と③の違いはどこにあるのだろうか。

ここでのリスやチンパンジーやラットは、目標状態の表象を持たず、ただ目標対象の表象をもつだけである。

「リスの場合、目標の表象は未来の目標状態の表象ではなく、今存在する目標対象の表象である」 284

「動物が自分の行っていることの結果を予期しているということは、動物が行っていることがその予期によって制御されていることを意味しない」 265

この「制御」のためには、次の3つを区別する必要がある。

「投射される目標状態」

「客観的に表象される未来状態」

「客観的に表象される現在状態」 (Cf. 273)

なぜなら、目標に向かう行為を制御するためには、現在の状態と「客観的に表象される未来状態」の比較が必要であり、その目標状態を実現したときには、そのこと分かる必要があり、そのためには「客観的に表象される現在状態」を持つ必要があるからである。

これに対応する文の例を挙げると次のようになる

「投射される目標状態」 (「ドアを閉めなさい」)

「客観的に表象される未来状態」 (「ドアが閉められるだろう」)

「客観的に表象される現在状態」 (「ドアが閉められている」) (Cf. 273)

ここにいう「投射される目標状態」が、指令的表象である。そして、指令的表象が機能するためには、記述的表象を持つ必要がある。これらは、実践的推論を構成する部品となるだろう。

(4) 言語的記号

「言語記号は自然的記号から出現する」 141

「動物の伝達信号は、ある活動の開始時に行われる予備的運動、つまり「意図運動」から進化してきたようである。もともとは、このような運動は同種の他個体にとってたまたま手がかりとして役立ったにすぎない。それは、それに続く活動、またはその活動を起こす通常の刺激、たとえば危険やえさ、交尾の用意、敵対的または友好的感情などの刺激を表す自然的記号に過ぎなかった。」 142

「動物が行う用意のあることやその用意を喚起した刺激を同種の他個体を知ることはその両者にとってともに有益であることが多い。」 142

例えば、敵をみた一羽の鳥が飛び立つと、周りの鳥も一斉に飛び立つことである。これは遺伝子に組み込まれることもある。しかし、個体発生的な儀式化にとどまることもある。

「トマセロによれば、「手に入る証拠からすると、**模倣学習**ではなく、**個体発生的に成立する儀式化**によって、チンパンジーは伝達のための身振りを獲得」する」 142

個体発生的に成立する**儀式化**とは、次のようなことである。

「自分の赤ちゃんがあるもの手を伸ばすのを見た人間の母親は、それを取って赤ちゃんに手渡すかもしれない。そうすると、赤ちゃんはまもなく自分がほしいものにただ手を伸ばすだけになるだろう。」

(指さし行為は、ここから発生したという説がある。ただし、指さすのは、それを欲しいときに限らない。その対象に注意してほしいときには、指さしをする。xが欲しくてxに手を伸ばすときには、相手がxに注意することを意図することも含むが、それは別のことである。この分離が生じる時、指さし行為が成立する。指さしは、「あれを見て!」というような指令的記号だろうか?)

人間の場合には、このような儀式化によって成立した志向的記号が、模倣によって広まってゆく。「このようにして志向的記号が誕生すると、それはつぎに模倣によって、人間の間ひろまっていくだろう。」143

#3 種類の発話：オシツオサレツ発話、記述的発話、指令的発話

動物が言語を持つことがあるが、その場合の言語は、PP記号であり、記述的記号や指令的記号ではない。例えば、ミツバチのダンス。これに対して、人間の言語には、PPと記述と指令がある。ミリカンは、発話もまたオシツオサレツ発話、記述的発話、指令的発話にわけられる。

「記述的志向的記号 (descriptive intentional signs) と指令的志向的記号 (directive intentional signs) があるが、オシツオサレツ表象 (Pushmi-pullyu) は、同時にこの両方の仕方で機能する (「ジョニー、この教室では、話したい人は手をあげます」)。」146

「一つの文法上の法(mood)は、複数の機能を持つ。直接法は、命令的機能をはたし (「あなたは明日の6辞きっかりに指揮官に報告する」)、時に慣習的にオシツオサレツ的機能を果たす (「ただいま、休会中です」)。」146

質問発話はオシツオサレツ発話である

彼女は、質問発話については言及していないが、質問発話は、オシツオサレツ発話になるのだと思われる。質問は主張ないし記述的記号を答えとする理論的質問と、命令や約束など意図表明、つまり指令的記号を答えとする実践的に質問に分けることができるが、このどちらのタイプの質問発話もオシツオサレツ記号になると思われる。なぜなら、どちらのタイプの質問も、相手に返答を求める発話であるので指令の要素を持ち、同時に何らかの事実の記述を含むので記述的要素を持つからである。

予想される反論: 何らかの事実の記述を含むことは、命令や約束の発話の場合にも充てはまるのではないか。そうすると命令や約束もオシツオサレツ記号であることにならないか。

これに対しては、次のように応えたい。命令や約束の発話はオシツオサレツ記号ではないといえる。なぜなら、命令や約束な中の記述の要素は、問いの中にすでに含まれており、その問いに対する答えとして命令や約束をするので、記述の要素は命令や約束の発話が新たに主張することではなくて、問う者が問いの前提として行っている主張を受け入れているにすぎないからである。

主張の発話についても同様のことが言える。主張の発話は、相手に説得しようとしているので指令の要素を持つ。そうするとオシツオサレツ記号であることにならないか。

これに対しては、次のように応えたい。主張にも指令的要素がある。しかし、言葉に合わせて世界を変えようとしているのではないので、記述的記号である。

ミニレポート課題

課題1、オシツオサレツ (Pushmi-pullyu) の（「ジョニー、この教室では、話したい人は手をあげます」のような）例を挙げて、それが何を記述し、何を指令しているかを、説明してください。

課題2：質問発話が、オシツオサレツ発話であることへの反論、疑問を書いて下さい。もし賛成するならば、質問発話の例をあげて下さい。それが何を記述し、何を指令しているかを、説明してください。

良い年をお迎えください！！